

前に二足歩行の訓練がほどこしてある。これらの歩行とヒト及びイスの歩行について筆者らが観察した結果とを比較検討した。

霊長類の二足歩行には種ないし生活様式によると思われる差異が認められる。ニホンザルの歩行は垂直方向分力が一峰性であることが多く歩調が大きい。これらは一見ヒトの走行に似ており、片足で安定して立つことのないせわしい歩き方を示している。クモザルとチンパンジーはヒト歩行と同じ二峰性の垂直分力を持つが、後方へのけり出し分力は多峰性で、なめらかな運動を示さない。これらの差異は二足ないし一足による体の支持の動的安定性と関連し、種ないし生活様式の差による安定性への適応の差を示すと考えられる。ただし3頭のニホンザルには個体差がかなりみられる。今後同一種における実験個体数を増やすことと、種の数を増やすことが必要である。

四足歩行においては富田が指摘したごとく霊長類は他の四足獣とは前後肢の荷重分布が異なる。三分力ともに前肢より後肢が大きい。前後方向分力において前肢は主に制動をなし、後肢は主にけり出しの力を出している。これらは霊長類の前後肢の機能分化が進んでいることを示すと考えられる。

霊長類下肢骨格筋の筋線維構成に関する研究¹⁾

猪口清一郎 (昭和大・医)

霊長類上肢骨格筋の筋線維構成に関する研究¹⁾

岩本壮太郎 (同上)

サルの骨格筋の組織構成をヒトのそれと比較検討するために、カニクイザルの長内転筋、縫工筋、薄筋、上腕二頭筋、胸鎖乳突筋及び腹直筋各10側の筋腹横断面につ

いて、組織構成比、筋線維数及び筋線維径を調べた。

断面における筋線維と結合組織との面積比を見ると、筋線維比は81.2% (胸鎖乳突筋) から75% (縫工筋、薄筋) の間にあり、これを腹直筋についてのヒトの観察例と比較すると、その最盛期 (18~19才, 20才代) よりも低い。

横断面における筋線維総数は検査例中、上腕二頭筋 (平均: 103,009) が最も多く、他は32,000~33,000 (胸鎖乳突筋、腹直筋、長内転筋、薄筋) からそれ以下である。而して、各筋についてその最高値と最低値の比から見た変異の中は上腕二頭筋が最も大である。また、ヒトの対応する筋と比較すると各筋共ヒトよりも著るしく少なく、サルの平均値はヒトのそれよりも腹直筋及び上腕二頭筋では $\frac{1}{2}$ 、胸鎖乳突筋では $\frac{1}{3}$ 、長内転筋では $\frac{1}{4}$ 、縫工筋では $\frac{1}{5}$ であり、下肢でその差が大なる事が認められる。

1mm²中の筋線維数をヒトの対応する筋と比較すると、各筋共1mm²中の筋線維数はサルの方が大であり、比較した筋の中で長内転筋及び縫工筋では上腕二頭筋及び胸鎖乳突筋にくらべてヒトとの差が著るしく大である。

筋線維の直径をヒトの対応筋と比較するに、上腕二頭筋では各々28 μ 前後で略々相等しいが、胸鎖乳突筋及び長内転筋ではサルの方がヒトよりも小であり、特に後者ではその差が著るしい。また、腹直筋についてもヒトの最盛期 (20才代) のそれよりもサルの方が小である。

以上要約するにサルの骨格筋は一般にヒトにおけるよりも結合組織成分が多く含まれるが、筋線維についてはヒトよりも断面中の総数は少なく1mm²中の筋線維数は多くかつ筋線維径は小であり、この傾向は特に下肢筋で著るしいと云う事ができる。

設定課題 3. 霊長類の生理的適応に関する研究

霊長類の発汗機能に関する比較生理学的研究²⁾

中山昭雄 (名大・医)³⁾

堀 哲朗 (熊本大・体質医研)

只木英子 (金城学院大・家政)

原田温子 (熊本大・体質医研)

この研究は昭和48年5月、7月、8月に日本ザル3匹 (高崎 12, 78, 78 old) とカニクイザル1匹について行なった。

¹⁾ 両研究者は共同して研究し、一つの報告書にまとめた。

²⁾ 登倉尋実 (霊長研)・鈴木正利 (名大・医)・西尾晃 (国立衛生試験) との共同研究。

³⁾ 現在の所属: 阪大・医

1) 日本ザルの発汗について

一般体表面の発汗は室温40°Cにおいてもほとんど増加しない。しかし皮膚 (胸、背、大腿) を局部的に加温すると、皮膚温38°C以上で2~3分の潜時で汗滴が出現するのを和田・高垣法で認めた。

手掌面は室温29°Cでも発汗している。この発汗は下肢に加えた電気刺激によっては増加しなかったが、室温を上昇させると、それに比例して増加した。しかしこのとき手掌皮膚温も上昇した。

2) 視床下部加温冷却の効果

あらかじめ3本の熱極を視床前野領域に慢性的に植込んだサルについて、室温17, 26, 31°Cにおいて視床下部を加温冷却し、代謝と皮膚温変化を観察した。一般に加